

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1990100024		
法人名	社会福祉法人 ひかりの里		
事業所名	グループホーム めだかの学校悠ゆう		
所在地	山梨県甲府市武田2丁目8-17		
自己評価作成日	平成28年11月30日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/19/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会
所在地	甲府市北新1-2-12
訪問調査日	平成28年12月13日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

2階建ての民家を改修したホームで、家庭的な雰囲気のある環境です。1階に3室の居室と皆が集うリビングキッチンがあり、2階に6室の居室があります。2階には階段を昇りますが、生活の中でリハビリに繋がっています。庭には花壇があり、ご利用者が花や野菜を育てたり、四季の草花を鑑賞したり憩いの場となっています。

近くに同一法人の児童養護施設があり、児童と一緒にの行事や、外出、おやつ作りなど、交流があります。また、2、3名のグループ分かれて、ご利用者の希望の場所に出かける個別外出や、同一法人のグループとの交流も盛んで、四季折々の行事や、買い物などを合同で行ったり、職員間で助け合い、双方の入居者を支えあう連携体制も整っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

甲府駅北口から武田通りを北進した新紺屋地区に位置し、2階建て民家を改修して事業所としている。近隣に同一法人が運営する介護事業所や、児童養護施設があり相互に協力や連携をしている。家庭的な環境での生活は日々のなかで感じられ、食事も火曜日と金曜日の夜の献立を自由メニューとして利用者の希望を聞いている。料理を得意とする利用者も職員と一緒に調理や盛り付けを行い、やってみたいという前向きな気持ちを引き出すような場面を作るようにしている。めだかの学校「悠ゆう」の名前は、開所時に職員からの公募で決めたという。管理者も開所時から交代もなく職員との信頼関係を築いて、事業所理念を実践して日々利用者に寄り添った支援に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

事業所名:

グループホーム めだかの学校悠ゆう

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人の生きてきた過程と尊厳を大切に、安心して笑顔で過ごせるよう、理念を共有し、ケアにあたっている。	「尊厳と安心」を理念として、その人らしい安心した暮らしが続けられるよう、職員会議や処遇会議等で理念について職員間で話し合いの機会をもっている。利用者、一人ひとりの日々の暮らしがケアに反映されているかを確認して、管理者と職員は笑顔で接する日々の支援に努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域の文化祭や防災訓練、もちつき大会、健康料理教室など、地域活動や行事に参加しており、地域の方々の受け入れも良い。また、自治会にも加入し、職員は普段から挨拶はもちろん、困っている時など声かけ助け合いを心がけたり、地域内の商店を利用するなど交流を図っている。	自治会に加入していて、回覧板が回ってきている。地域の情報を得て、健康料理教室や餅つき大会等の行事に利用者と一緒に参加出来ている。また、防災訓練や文化祭には貼り絵や書道、合唱発表で参加している。地域の人が認知症について理解があり、普段の暮らしの中で隣近所の人たちとの交流をしている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	サービスの利用や介護についての相談など、施設に立ち寄られたり、電話での相談もあり、随時対応している。また、認知症サポーター養成講座を地域包括支援センターと協力し開催した。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議に地域の知見者、利用者、利用者家族に出席していただき、サービスの実際、評価への取り組みについて報告し、感想や意見、要望など聞いている。また、その結果については、職員会議等で職員に周知し、今後のサービスに活かすよう話し合い、取り組んでいる。	2か月に1回、第3水曜日の午前中に開催している。民生委員、地区社協会長、利用者家族、地域包括支援センター職員等がメンバーで、事業所からは行事や利用者の実情等の報告を行い、参加者からの質問、意見、要望を受けている。早急な課題については職員会議で話し合う前に検討し、ケアに反映するようにしている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	困った事や疑問があった場合は市役所に行ったり電話にて相談にのってもらうなど日頃から協力してもらえるようにしている。	市の担当者には運営推進会議の議事録や居室の空室状況等、事業所の実情や取り組みを向いて話したり、電話で相談するなど協力関係を築くよう取り組んでいる。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員研修や職員会議を通して、身体拘束について全職員が認識できるよう指導している。また、物理的な拘束のみならず、日々の業務の中での何気ない声掛けも、身体拘束につながる場合があることも例を挙げて説明し、身体拘束について周知徹底できるようにしている。	事業所全体での職員研修や、職員会議で身体拘束によって利用者に与える身体的、精神的負担を理解し、身体拘束をしないケアに努めている。利用者の行動を制限するような行為はその都度、実例を挙げて説明し、徹底理解を図っている。日中は玄関等施錠しないで安全面に注意して、自由な暮らしを支えるように支援している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員研修で虐待防止について学ぶ機会を設けている。身体的虐待だけでなく、職員の声かけや、対応にも、虐待につながるため、虐待のない施設を目指している。また、入浴時の身体観察や、健康チェック等で、異常に気づき、報告することも大切だということを教えている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	家族から相談を受けることがある。また、後見人制度を利用している利用者もいるので学ぶ機会を設け、職員全体が理解出来るよう努めている。個々の必要性に応じて本人・家族に適切に制度を導入してもらえる様、支援していくことが課題である。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時や改定時には、契約書に基づいて説明を行い、利用者や家族に不安な点があれば、分かりやすく十分な説明を行い、理解、納得を図っている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名:

グループホーム めだかの学校悠ゆう

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に、利用者、家族に参加してもらい、意見や要望を聞いている。また普段、面会時などにご家族の意見や希望を伺うよう努めている。ご家族が職員に話しやすい環境づくりにも努めている。聞いた意見、要望については会議、引継ぎ等で周知し、運営に反映するよう計らっている。	運営推進会議への出席された時や面会時に家族等に伝え、管理者や職員に何でも話してもらえるような雰囲気づくりをしている。出された意見や要望は職員会議や職員連絡ノートに記載し、職員間で共有してケアに反映するようにしている。また、病院受診内容を利用者の家族から聞くこともある。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や要望等を、日々の業務の中や個別に聞く機会を設けるよう心がけている。可能なものについては反映・導入している。	管理者は職員からの意見や要望を聞くように心がけ、日頃からコミュニケーションを図るよう心がけている。勤務希望表を作成し休暇は希望制で取りやすくして、職員の働く意欲の向上に繋げている。日頃、利用者との関わりのある職員の意見で介護用ベットの交換や、入浴日を男湯・女湯にするアイデアをケアに取り入れた。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	休み希望や職員の勤務可能な条件も考慮して勤務体制を組み、子育て中の職員や短時間のみ働ける職員も可能な限り勤務できるようにしている。資格取得した際のキャリアアップ制度や能力・やる気に応じた昇給もっている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年5回の内部研修会や月1回の職員研修を行い、知識や技術の向上を図っている。外部の研修も、案内を職員に周知し、積極的な参加を呼びかけたり、必要に応じて参加要請している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人時に多数の施設があるので、合同の研修や行事の開催など交流がある。また、法人内での他施設研修を行い職員のスキルアップを図っている。外部の施設との交流が持てる研修会への参加も推進し、情報交換や、サービスの質の向上を目指している。			
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入時には、開始前にご家族にそれまでの生活の様子を伺い、本人にも可能な限り、困りごと、不安、生活に対する意向などを聞き、理解するように努めている。その方の状況に応じた受け入れ、言葉かけの工夫をし、入所の際にできるだけ不安のないよう対応している。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入する段階で、ご家族には、ご本人それまでの生活、ご家族としての困りごと、不安や要望等を親身に聞き、安心してサービスを利用できるように、関係づくりに努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、ご家族からの話をよく聞き、その人らしい生活のために必要な支援を見極め、インフォーマルなサービスも含めた支援の方法を考えている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家庭的な雰囲気大切に、家事等、自身で出来ることは出来る限りしていただいている。職員は時には娘や息子、孫のように接し、お互いに叱咤激励できるような関係作りが成されている			

自己評価および外部評価結果

事業所名:

グループホーム めだかの学校悠ゆう

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人や家族にしか分からない関係性や、これまでの生活を踏まえ、家族、施設双方が本人に対する悩みや、心配事を相談し合える関係性を大切に、共に支え、良い方向に解決していく姿勢をとっている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人や家族からこれまでの生活や友人関係を聞き、会話の中に取り入れ、馴染みの場所に出かけたりしている。また、家族だけでなく、知人や親せきの方にも面会に来ていただくようお願いしたり、友人との集まりに継続して参加できるよう計らっている。	入居前から出席していた同窓会に家族が連れて行き、帰りは知人に送ってもらっている。つながりのある親戚の人にも面会に来てくれるよう働きかけている。また、家族が親戚からきた手紙を持ってきて、職員と一緒に返事を書いて郵送している。個別外出で自宅に行くなど、人や場所との関係が継続できる様支援に努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家庭的な空間、雰囲気大切に、皆で和気あいあいと話したり、慰め合う、支え合う光景が見られる。時には揉めるような場面もあるが、職員が間に入り、大きな争いに至らぬよう対応している。新規入居者や孤立しがちな利用者には、席の位置を工夫したり、職員が会話をとり持ちして、交流を支援している。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に入所された利用者については、移動前に先方の施設職員に来ていただき、施設での本人の様子を見て頂くとともに、これまでの経過や対応の方法など十分な説明を行っている。移動後も職員からの相談を受けたり、訪問するなどして、支援に努めている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段から一人ひとりの利用者と会話をもち、話を聞くように心がけている。ケアプラン更新時には改めて確認するようにしている。聞き取りが困難な場合は、日頃の行動や何気ない会話の中から、本人の気持ちや希望をくみ取るよう心がけている。	入居時に家族等から情報を得て、思いや意向の把握をしている。利用者とは日々のかかわりの中で声掛けをし、話を聞くように努めている。また、お風呂に入っている時はリラックス状態であることから、思いや意向を聞きやすい。困難な場合は表情から判断したり、日頃の行動を見て思いや意向を把握するようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時には、事前に、生活歴や、これまでの生活のありさまや人との交流の様子、趣味、サービスの利用状況や経過など、可能な限り、本人、ご家族に聞くようにしている。入所後も本人との会話の中から、把握するように努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	これまでの家庭での一日の過ごし方を把握し、また、本人が自分でできていた事柄を知り、入所後も続けて行えるよう支援している。入所後も本人のできることを見極め、職員間で共有し、その方が持っている力を奪わず、維持して生活していけるよう支援している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の希望するその人らしい生活の実現を念頭に、本人はもちろん、ご家族や必要な関係者に話を聞き、職員は日々のケアの中での変化や、要望や困りごとなど気づきをあげて共有し、処遇会議で話し合い、介護計画や実践に反映している。	入居時に関係者で話し合い、家族の要望を聞いて介護計画を作成している。2か月後に家族に経過報告をして、アセスメントを含めて処遇会議で意見交換やモニタリング、カンファレンスを行っている。6ヶ月毎に見直しを行っているが、家族の要望や変化が生じた場合には、モニタリングに基づいた介護計画の見直しを行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、本人の様子や言葉、気づき、ケアの実践について個別の記録に残し、なおかつ、特記事項については申し送りノートに記載し、職員間で情報を共有し、実践や介護計画の見直しに活かしている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名:

グループホーム めだかの学校悠ゆう

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	臨機応変な柔軟な対応に心がけている。既存のサービスにとらわれず、			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居施設の場合、施設の中だけで完結できてしまいがちであるが、可能な限り地域資源を掘り出し、活用できるように、広い視野を持ち、情報に耳を傾けるように心がけている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	契約時にかかりつけ医を聞いている。家族と同行にて受診対応し協力している。主治医と面識を持ち顔なじみになるようにしている。また、施設にて受診対応も行っている。主治医に必要な事を伝えたい時、手紙にて情報提供を行っている。	入居前からのかかりつけ医に、5名の利用者が受診している。基本的には家族同行になっているが、不可能な時には職員が同行している。法人のクリニックを2名が職員同行で受診し、往診医を1名が家族の希望するかかりつけ医として受診している。受診結果に関しては、変化や薬が変わった場合は家族と情報の共有をしている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員には気づきを心がけてもらっており、気づいたことは管理者・看護師に随時、相談・報告し適切な受診や看護が受けられるように支援している。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入居者が入院した時は情報提供を行っている。入院中は面会などの折、情報をもらい退院時にはいつでも対応出来る様に相談させてもらっている。入居相談などで医療相談室との馴染みの関係が出来ている病院もある。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	高齢ということもあり、先の事を考え契約時・入居時から本人・家族と終末期等の意向や希望を話し合うことにしている。家族には誤解せずに受け止めてもらえる様、また、施設として出来る事の範囲があることも話す機会を時折もうけ時間をかけ取り組んでいる。職員には看取り・終末期の勉強会をおこない心の準備に努めている。	入居時や見学時に、事業所が対応し得るケアについて説明を行っている。重度化した場合は、利用者や家族の意向を確認しながら話し合いの機会を作って、事業所での支援方法を踏まえて方針を話し合っている。今までに看取り対応をしたことはないが、看取り対応の研修を定期的に行って、チームで支援に取り組んで行けるよう準備に努めている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	内部研修や職場内勉強会にて職員が講師となり、緊急時の対応・連絡体制を研修している。最低でも年に1回日赤救急法指導員を招き救急法について指導を受けている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	外出行事などを利用し日中や夜間を想定した避難訓練を行っている。内部研修会において水消火器訓練を取り入れたり大震災に備え備蓄や大雪時の対応にも職員に周知している。地域の消防団員へ協力要請のお願いに取り組んでいる。	年2回、避難訓練を実施している。日中と夜間想定で避難訓練を実施したが、初期消火を忘れていたり反省点があった。法人の内部研修では、水消火器や講話、消防署見学を行った。利用者の外出行事の時に火災を想定した避難訓練を行っている。地域の協力体制として消防団への協力要請に取り組んでいる。	一人ひとりの利用者の状態を踏まえて、いざという時に確実な避難誘導ができるよう夜間を想定した一人体制での訓練を実施して、全職員が身につけることを期待したい。また、消防署の協力を得て避難訓練、避難経路の確認、消火器の使い方などの訓練を行うことを希望します。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩として、尊敬の念を忘れずに、馴染みの関係を築きながらも、ひとり一人の尊厳を大事にし、プライドや人格を傷つけることのないよう、声かけや態度に留意している。居室への出入りは、本人が中に入らない時にも、本人に断り、ノックして入るなど、プライバシーにも配慮している。	利用者の居室に入る時にはノックしてから入り、荷物を置くときにも断って置くようにしている。着替え用の衣服やボータブルトイレ等には、布をかけるように配慮している。また、尿取りパット類の排せ用具も目立たない所に置くなどして、利用者の尊厳やプライバシーに配慮した対応をしている。		

自己評価および外部評価結果

事業所名:

グループホーム めだかの学校悠ゆう

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個別に話す機会を作ったり、受容的態度で接し、本人が素直に思いや希望を伝えたり、表現できるような環境作りを心がけている。また、押し付けでなく、本人の意思を尊重した処遇に取り組んでいる。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人らしく生きられることを念頭に、本人の希望や意向を取り入れたケアプランを作成し、実践している。業務の都合に合わせた画一的な処遇ではなく、一人ひとりのペースを尊重した処遇を心がけている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節や、バランスを考え、その人らしい服装に配慮している。外出する時は、TPOを考え、洋服選びをし、女性は化粧をするなど、おしゃれにも気を配っている。訪問美容カットの利用もしている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	普段から、一人ひとりの好みを聞き取り、食事に反映している。利用者の方に食べたいものを聞いて献立を考えたり、メニューを考えてもらうこともある。毎食ごとに、調理から盛り付け、片付けまで、利用者ができることを分担し、職員とともにやっている。	利用者の好みをふまえて、職員が交代で手作りの料理をしている。一週間の中で火曜日と金曜日の夜が自由メニューになっており、午前中に利用者の食べたい物を聞いておき、食材の買い物に利用者も一緒に行く時もある。盛り付け、片付けは出来る利用者が行っている。検食を含め、職員もお弁当を持ってきて一緒に食べている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の嚥下、咀嚼状況に合わせた食事形態での提供。また、健康状態に合わせ、医師の指示をもらい、減塩食などの対応をしている。食事状況、摂取量については毎回記録に残し、問題があれば受診時に相談している。水分もチェック表を利用し、水分不足にならないように努めている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、個々に合わせた口腔ケアを行っている。夜間は義歯を洗浄剤につけ、清潔を保っている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は離床し、全利用者トイレでの排泄を促している。一人ひとりの排泄のパターンや能力を把握し、それぞれに合わせたトイレ誘導を工夫し、できるだけ失禁がないように、自立に向けた支援を行っている。	排泄チェック表を使用して、トイレで排泄できるよう支援している。日中は自立して行きたい時にトイレに行く事ができる利用者が多く、身体機能に応じて手を差し伸べたり、歩行介助している。夜間はおむつを使用している車いすの利用者も日中は布パンツを使用し、立位を保てるように対応している。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便のチェックをし、個々のパターンをつかみ、早めの対応をしている。朝、冷たい牛乳を飲んでいただくなど、薬だけに頼らず、排便を促す工夫をしている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個々の体調や意向を考慮し、入浴を行っている。入浴を拒む利用者には、声かけや、タイミングを工夫し、気持ちよく入浴ができるよう支援している。	毎日、入浴は可能であるが、基本は週3回の入浴をしている。日によって、男湯、女湯と決めている。入浴を拒否する利用者には、「お風呂」と言うと入らないので、声かけを工夫して入浴を促している。入浴介助時も利用者の心情を察して、プライバシーに配慮した対応を心がけている。		

自己評価および外部評価結果

事業所名:

グループホーム めだかの学校悠ゆう

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は全利用者が離床して過ごされているが、本人の習慣や、体調に応じて、自室ベットにて休養をしていただいている。就寝時間はご本人の習慣や希望に沿うようし、早く寝る事を無理強いしないようにしている。寒い時期には、個々の希望により、湯たんぽを使用し安眠に努めている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ケースに服薬説明書を綴っており、職員が理解しておくようになっている。薬は施設で個別に管理し、服薬時には確実に内服が出来るよう確認し支援している。体調の変化にも留意し、医療と連携をとっている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴やこれまでの家庭での生活の様子を把握し、施設でも家事等、本人に合った役割を持てるよう支援している。また、それまでの職業や趣味が活かせるよう、会話の中で引き出したり、レクリエーションに取り入れられたりして、生きがいや楽しみが得られるよう支援している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や買い物、近隣施設との行き来は、日常的に行っている。普段行けないようなところは、家族にお願いしたり、個別外出という形で、本人の希望を聞いて計画し、実施している。また、利用者の希望を取り入れた季節折々の外出行事を計画し、参加を推進している。	利用者が、事業所周辺を押し車や車いすを使用して職員と一緒に散歩している。行けない時には駐車場に出る等、短時間でも戸外に出る機会を作っている。季節の花見や大型ショッピングセンターへの個別外出や、同一法人の近隣事業所と合同で普段は行けないような場所への花見や買い物ツアーに行っている。また、家族と一緒に外出している利用者もいて、外出を楽しめる支援に努めている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物等で、職員が付き添うことにより、自分で品物を選び、料金を支払ったり、外食などで、自分の好きな物を注文し、味わい、自分の財布から支払いをする等の機会を作っている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から電話があったり、施設から電話をかける時は、職員が出来ない部分を手助けし、話ができるよう援助している。また、本人宛に届いた手紙には、返事を出すよう支援したり、自分から手紙を書きたい希望があれば、準備等援助している。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	民家を改修した建物で、かぎられた空間であるため、トイレや浴室もすぐにわかる位置にある。のれんなどで仕切りを工夫しているのれんは季節ごとに変えるようにしている。ダイニングテーブルに置かれている鉢植えも季節ごとの飾りを利用者と付け替え季節感を取り入れている。	日中利用者が多くの時間を過ごしている共用の場所は、限られてはいるがテレビ、ソファが置かれ利用者がくつろいでいる。キッチンもオープンになっているので、調理する様子や匂いを感じることができる。ダイニングテーブルも食事の時と日常過ごす時には配置を変えている。季節ごとの壁飾りや利用者の書いた習字等が飾られ、居心地よく過ごせるよう工夫されている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	限られた空間であるため、一人になれる場所がないのが現状である。リビング内でテーブルを分けお茶をいただくなど工夫している。一人になりたい時などは居室で過ごす事や職員と2階へあがり洗濯を取り込みながら話をしたりする対応をしている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室にはそれまでの生活で馴染みのものを持ってきていただいたり、家族との写真を飾るなど、本人が安心でき、居心地良く過ごせるよう工夫している。また、紙パンツやパット類は、人目につかないよう配慮している。	民家を改修した居室は1階と2階にあり、それぞれ部屋の形態は違うが、ベット、エアコン、カーテンが備え付けてある。整理ダンスや時計、テレビ、ぬいぐるみ、家族写真等も置かれ、利用者の馴染みの道具で居心地の良さに配慮している。階段には危険防止柵が工夫して設置され、安全に努めている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	限られた空間であることで、職員の目が届きやすく、身体機能の状況を把握し易いといった利点もある。狭さゆえに、車いすに頼らず、椅子やソファを頼りに歩く意欲に繋がっている。階段の昇り降りは、日常生活の中でリハビリとなっている。			